

第二十三章 狂ったシナリオ

福田赳夫蔵相が田中首相の政治姿勢を批判してそのポストを去り、大平が後任として外相から横すべりして大蔵省に初登庁したのは、昭和四十九年七月十六日のことである。昭和十一年に東京商大卒業直後に入省して以来三十八年ぶり、池田蔵相の秘書官を最後に同省を退官してから二十二年ぶりであつて、大平は「まさか、この主人公になるとは夢にも思わなかつたなあ」と、感慨深そうに就任の感想をもらした。当時、高木文雄事務次官、竹内道雄主計局長らも「おとうちゃん」の愛称で知られていた大平蔵相の登場を、一種の「父帰る」といった雰囲気でも迎えた。

だが、そうした省内のムードはともかく、新蔵相を迎える経済情勢は、内も外もまったく窮迫した厳しい局面にあつた。石油価格を一挙に四倍にも押しあげた前年秋の石油ショック以後、物価はウナギのぼりに高騰し、四十九年二月の卸売物価上昇率は前年同月比三七%にも達し、福田前蔵相の言う「狂乱物価」の様相を呈した。物価はその後やや落ち着きを見せたものの、個人消費の停滞、設備投資の落込み等により景気の後退も進行していた。

大平はその頃のことについて書いている。

「大蔵省に行つてみると、対外決済の問題が異常な緊張を呼んでいた。大幅に値上りした石油その他各種の資源の決済期限は、容赦なく到来し、日夜、その資金手当に忙殺されていた。私は百万手を尽くして、短期資金の取り入れを行うかたわら、中、長期借款の確保に努めた。そのため一時は、『ジャパン・レート』という不名誉な条件をのまなければならぬ場合もあつたが、八月の上旬になって、当面する対外支払難を何とか乗り切るめどがあつた。」（『私の履歴書』）

財政収入の激減による赤字の増大を覚悟せざるをえないという状況のもとで、政府は、物価対策のための総需要抑制基調を堅持しつつ、安定成長路線への移行という、中期的なわが国経済の進路を手さぐりしていた。

大平新蔵相は、就任のさいの記者会見で、「内外ともに重大な局面を迎えているので、経済の安定、人心の安定を図ることが大切だと思う」と述べ、「大蔵省は何事によらずチェックし抑制することが多く、大蔵大臣はあまり評判がよくないのが当たり前である。総理も各大臣も十分に自重してもらえらると思っている。友情と財政とは別だ」とその心中を披瀝した。この発言の中で大平が田中首相に言及して、「友情と財政は別」と述べたのは、田中政権の一枚看板であった日本列島改造論にクギをさしたものと受け取れ、大平がいかに厳しい決意で就任したかを記者たちに印象づけた。

大平は蔵相就任後のインタビューで、「田中さんも人間だから、権力主義的ではないか」、「驕慢ではないか」、「自信過剰ではないか」と言われるようなフシが全然ないとは言えないと思う。だから、十分、政府、党の手順を踏まないで発言することもなかったとは言えない」と田中批判の一面の妥当性を認めつつも、「しかし、田中さんという人は非凡な人で、その思想と実践、これは相当研究に値する。表面の行動ばかりでなく、その考え方を十分研究する価値のある人だ。（私は）友人として協力も忠告も十分でなかったと反省している。よかれと思うことはアドバイスし、精一杯努力せにやいかんと思っている」と述べた。

こうした大平の発言は、三木、福田両実力者が閣外に去り、ピンチにあえぐ田中政権に対し、閣内に残る実力者閣僚として、依然田中政権を全面的に支援していく考えを表明したものであり、政権発足当初に誓い合った「二人三脚で協力し合っていく」という盟友関係は、情勢の変化によっても全く変わらなかった。

当時の財政当局がかかえていた問題は、要約すると、第一は、総需要抑制政策をいつ緩和するか、第二は、公共料金の抑制をどの程度にすべきか、第三は、物価と賃金の悪循環をどうやって断ち切るべきかということである。

大平は、大筋は一応、福田前蔵相の敷いた路線を踏襲する方向を示したが、公共料金問題については、「できるかぎり抑

制する方向を堅持したいが、むりやり抑えることにより後遺症が残り、かえって経済を損なうことも考えなければならぬ」とし、また、賃金、物価問題をめぐって導入の是非が論議的となっていた所得政策については、「活力ある経済を維持して行く上からみると、所得政策は本来好ましくない」として、基本的には民間の創意工夫と努力を重視し、市場経済「プライスマカニズムに信を置く姿勢を示して、福田前蔵相の行き方とは微妙なニュアンスの相違を見せた。

蔵相としての大平の本格的な初仕事となったのは、四十九年度米価の問題であった。就任から一週間目の七月二十二日には生産者米価の三七・四％アップが決定されたが、その大幅アップの背景には、物価の高騰および四十九年春闘における賃金の急激な上昇があった。財政の責任者である大平蔵相は、生産者米価に対応して直ちに消費者米価を引き上げるか、あるいは消費者米価を抑制して財政負担の増大による財政体質の悪化に甘んじるかという、物価と財政の間の厳しい選択を迫られることになった。

さらに、四日後の七月二十六日には、公務員給与の二九・六％アップという人事院勧告が出された。米価問題につづいて、財政負担の一層の増大を迫る要因がのしかかってきた。

物価重視の世論やこれを背景とする経済企画庁は、消費者米価の抑え込みを主張したが、大平はあえて大幅な消費者米価引上げに踏み切り、その結果、九月になって三二％の引上げが決定された。

大平は、この頃、「どれを選択しても厄介な仕事なんだ。せめて、レス・ワース（両方とも悪いが、Aの方がBよりまだ多少まし）」ということを考えているところだろう」ともらしていたが、その心中には、財政の責任者としてこれ以上財政負担を増大したくないという考えのほかに、経済が苦しい中では、個人も負担すべき点は負担すべきであるという信念があったと思われる。これについて大平蔵相は、のちに『私の履歴書』の中で次のように記している。

「かくて日本経済は、中央、地方を通ずる財政赤字の拡大、企業収益の悪化という環境の中で、独り個人の家計は均衡が保たれ、実質所得が維持され、貯蓄性向も衰えをみせなかつた。財政や企業の犠牲で、家計が維持されているこのような状態は、たしかに健全な姿とはいえず、後に財政の健全化、企業収益の回復等むずかしい問題を残すことになった。」

ところで一九七四年（昭和四十九年）の夏は、米国も日本も政情は極めて不安定な状況にあった。米国ではウォーターゲート事件の究明が最終的段階に入り、八月八日にはとうとうニクソン大統領が辞任、フォード副大統領が昇格する政権交代となった。世界的に政権担当者の不正が厳しく追及される気運が醸成されつつあり、日本もまた例外ではなかった。そして夏から秋にかけては、七月の参議院選挙における「金権選挙」問題に端を発した田中首相への「金権体質」批判が、自民党内の抗争、野党の田中政治批判とむすびついて日増しに激しさを増しつつあった。

こうした中で、田中首相は九月十二日、メキシコ、ブラジル、カナダ歴訪の旅に出発したが、めっきりやつれて帰国した。田中にはのちに「あの旅は失敗だった。三十六度を越すところから雪の降るところに飛ぶのだ。あの気温の差が身体にあたる影響は、想像を絶するものだった」と語ったが、大平も死の直前の最後の旅にほぼ同じコースを辿ることになる。田中首相にとっては、この旅の終わりにバンクーバーで、折からIMF（国際通貨基金）総会出席のためカナダ、米国を訪れた大平蔵相と落ち合い、ゴルフを楽しんだのが唯一の息抜きであった。ゴルフの合間にどのような話合いが行われたかは明らかでないが、田中首相が大平に幹事長就任を打診、大平が「二カ月前に大蔵大臣を受けたばかりじゃないか」とこれを断ったという説も伝えられている。

十月九日には、心身の消耗が激しい田中首相に一層強烈な打撃を加える事件が発生した。評論家立花隆を中心としたグループの「田中角栄研究 その金脈と人脈」を特集した雑誌『文藝春秋』十一月号が発売され、田中の資産形成をめぐる疑惑や女性関係を含めた人脈などが暴露されたのである。

「全体がクモの巣を張りめぐらされたような形で弁解のつかないようになっていく。やはり『打開に道なし』という直感的なものを強く感じた。このことは党の体質とも関連するが、同時に田中首相個人の政治生命にも関する問題となっていくと考えた」（保利著『戦後政治の覚書』）という保利茂の直感は、その特集を読んだ政界の受止め方を的確に表現している。

伝えられるところによると、田中は『文藝春秋』発売直後の十月十一日、大平に対して、「あるいは辞めるケースも……」と心中をもらしたが、この日の首相は、これを妨げるものとして、大洋州とビルマへの第二次外遊、内閣改造人事、フォード米大統領の訪日などの日程をあげ、いささか迷っているように見えた。「どうしたらよいか思索している」という田中の言葉に答えて、大平は言葉を強めて言った。

「計画された外遊は公務なのだから、辛くともやりとげなければならぬ。内外ともに暗い状況だが、しかし、いま動揺してはいけない。……キミの外遊中、あらゆる情報をキャッチできるように与野党内にリーダー網を張りめぐらし、山や川を立体的に掌握できるようにしなければならぬ。一階堂官房長官にもそう指示してはどうか……」。

だが、大平は同時に、国内政治の見通しにふれ、「展望を持たないで臨時国会を開くことはできない。局面は非常にむずかしくなってきた」と政局の状況が厳しいものであることを指摘した。また、金脈問題についても「第一義的にはキミ個人のことなのだから、キミ自身がどう考え、どう措置するのか、道を誤らないようにしなければならぬ」と述べたとされる。田中金脈問題に対する大平のこうした考え方は終始一貫しており、この問題がこのあと国会で取り上げられたさい、守秘義務の立場を貫きつつも、「第一義的には田中氏個人の問題」という見解を示している。

十月二十二日に外人記者クラブで行われた田中首相の記者会見は、いわば査問委員会的雰囲気での問題の追及に終始して、『田中金脈』は国内問題から一挙に国際的な話題にひろがり、それがまた、一層増幅されて国内にはねかえってきた。参議院大蔵委員会でも、野党側が田中首相の個人所得と田中の関係する企業の法人所得などをめぐって追及を開始し、党内でも、三木、福田、中曽根三派の若手・中堅議員から構成される『党再建議員連盟』が首相に対して財産の公開などを要求、臨時党大会か両院議員総会を開いて基本姿勢を明らかにすべきだとの態度を決めるなど、『田中金権政治』に対する批判がいつせいに噴き上がったのである。

日頃強気の首相も、政権をこのまま維持すべきかどうか、深刻に受けとめねばならぬ窮地に追い込まれた。十月二十八日に始まる豪州、ニュージーランド訪問の日程を前にして、田中は自らの進退と政局の行く末について肚を固めるため、

二十四日には、田中・保利、田中・大平会談が、二十五日には、田中・前尾（衆議院議長）、田中・河野（参議院議長）会談が、ついで二十六日には、田中・椎名（副総裁）会談が持たれた。

この二十四日の田中・大平会談後、大平は記者たちの質問に答えて、次のように述べている。

まず政局については、「田中は保身のことは考えていない。政治の天才の田中のことだから、われわれよりずっと先のことを考えているだろう。熱湯の中で頭だけを出している状態だから、これ以上つらいことはない。しかし、田中は冷静だ」といって金脈問題について、「第一義的には田中個人の問題だが、自民党総裁として自民党の問題であり、内閣の問題でもある。したがって最終的には田中自身が判断すべきことである」さらにこの問題に対する大平自身の考え方については、「私としては、友人として苦しみを分かち合おうということだ。この問題にどう対処するか結論は出ていない。毎晩考えているところだ。田中が（第二次外遊から）帰ったら、私の考えを話すつもりだ」

大平はこのときしきりに「田中は冷静だ」と述べていたが、その後の経過からすると、田中は大平に自分の進退とそれに伴う政局の舞台回しを相談したと見られる。のちに田中はこの点に触れ、「大平君は（政権担当については）熱柿精神だからね」と、二人の間に相当突っ込んだ話合いのあったことを示唆した。

翌二十五日に行われた田中・河野会談のあとの記者会見で、河野が「田中は『オレは（政権に）恋々とはしないよ』と述べた」ことを明らかにし、「ともかく（政局收拾には）『二つの道』がある。来月末には大波瀾があるたるつ」という感想を述べたため、翌朝の各紙はいっせいに「首相、進退を考慮」と報じ、田中の進退問題は一挙に公然化してしまった。

その二十六日早朝、田中は椎名副総裁を自白の私邸に招いて会談し、密かに「君が暫く政権を預かってくれるのが一番よいのだがな」と椎名暫定政権を打診したという。段取りとしては、田中が第二次外遊から帰国したのち内閣改造を断行して、椎名副総裁を副総理格で入閣させ、間もなく自らは身を引いて、椎名が田中の総裁の残りの任期（約八カ月）を総理・総裁として「預かる」というものであった。

椎名は健康上の理由などから即答を避け、首相が外遊から帰国した後には再協議することとした。

先の河野発言にあるように、田中の心中には、このとき『二つの道』があつたであらう。一つは、総裁として盟友大平を後継総裁に指名し、大角体制によって政局を切りぬけようとする道である。だがこの場合、三木、福田らの反発は明らかだし、中曽根も微妙な動きを示している。無理をして大平政権を樹立しても、果たして安定政権となりうるか。しかも、出来上がった政権は『田中亜流政権』として世論の批判を真向から浴びるであらう。それが大平のためによいかどうか。問題は大平の意志次第ということになる。

もう一つの道は、暫定政権で局面を回し、その後、大平政権をつくるという考え方である。この場合は『椎名暫定』で行く。

いずれにしても、田中が大平政権の樹立を願う気持ちにはなかつた。むしろ、政権は天下の公器であり、勝手に論議すべきものではない。先の一連の会談で、田中はそれぞれの考え方を打診はしたものの、外遊から帰って再度話し合ふこととし、結論は棚上げにして、十日余りの考慮期間を置くこととなつた。

しかし、政権は一人で思案するには重すぎるものである。まして椎名副総裁は病身でもあり、肚を割って話し合える仲間と相談せざるをえず、こうして、椎名暫定政権構想は、首相の外遊中に政界の奥深いところから漏れはじめ、独り歩きを始めたのであつた。

十一月八日、田中首相が帰国すると、翌九日、椎名は一定の条件のもとに暫定政権を受ける意志をもつて田中と会談した。椎名の考えは、自分は病身のため、首相となればその職に専念せざるをえない。折角、派閥解消など党改革に意欲を燃やしているところなのに、党の体制が大派閥の代表によって占められたのでは、党主導の政権運営ができなくなる。そこで自分と政治理念が近い三役人事が行われるなら、暫定政権を引き受けることができる、というものであつた。そのため椎名は、田中に三役に関する椎名案も提示した。幹事長に福田一（船田派）、総務会長に西村英一（木村武雄）（いずれも田中派）、政調会長に小山長規（大平派）か橋本龍太郎（無派閥）という案である。

同じ十一月九日、大平蔵相は、橋本幹事長の要請で、水戸へ講演に出かけていた。かねて田中にバタつかないように助言しており、改造をやるのなら何らかの相談があるはずと信じていた大平にとつて、情勢は意外な急進展であった。「なぜそんなに（改造人事を）急ぐ必要があるのか。どんなバックグラウンドがあると言つのかね」と大平は不快感をかくそうとしなかったが、水戸から帰京するとその足で田中邸を訪問、約一時間半にわたる会談を行った。

会談を終えた大平は、「総理はいまの事態の責任を日本中の誰よりも感じている。苦しんでいるよ。人生の哀歎について語り合ったんだ」と厳しい表情で語り、改造人事については「目白の方はスケジュールがヒシッと決まっているんだよ。改造も、田中内閣がいま何をなすべきか、すべきでないか、そのポリシーの一つの手段だ。改造をやる、やらないは大したことじゃない」と述べ、改造人事をやること自体は認めたが、その内容については言うべきことを言ったという含みを示した。

これより先、椎名暫定政権構想に対して、田中からストレートに大平へというもつ一つの政権構想も形を整えつつあった。党の三役を田中、大平の強力ラインで固め、強気で中央突破し、行けるだけ行つて、いよいよの時には大平にバトンタッチするという方針が田中派と大平派幹部の間で固められ、田中の帰国を待っていたのである。

こうして二つの構想の選択を迫られていた十一月十一日、田中首相は改造人事を断行し、注目された三役は、幹事長には二階堂進（田中派）、総務会長には、椎名副総裁が執着した福田一ではなく、大平派の鈴木善幸の留任、政調会長には中曾根派の山中貞則が決まって、椎名構想はまったく受け入れられていないことがはっきりした。憤懣やる方ない椎名は、「好きなようにやればいい」と言ひのこして私邸に引き揚げたが、椎名周辺では椎名暫定政権を警戒する大平が巻返しを行い、椎名構想をつぶしたのではないかという疑惑が強まった。もちろん、こうした経緯から、田中首相が一時は考え、保利らも推した椎名副総裁の副総理格での入閣も実現しなかった。

改造人事を強行したものの、もはや田中政権の前途に展望が開けることは期待できなかった。自民党内では「田中以後」を模索するさまざまな動きが出ていたが、大平は、とにもかくにも、国家的行事である十一月十八日からのフォード米大

統領の訪日が終わるまでは、一切の政治的な動きは慎むべきであると考えていた。

フォード大統領来日の十八日午前に開かれた閣議のあと、大平は首相に会い、「いまはフォード歓迎一本に全力を注ぐべきだ。フォードがわが法域内にいる間は、外交儀礼上からも（退陣表明は）すべきでない」と説いた。フォード訪日の公式日程は十一月二十日で終了し、二十一日付各紙朝刊は一斉に「田中首相、退陣を決意」と報じた。

党内は待ちかねたように火を噴き始めた。先制攻撃をかけたのは大平擁立路線であり、二十一日、鈴木総務会長は、「後継総裁は公選で選ぶべきである」とまず方法論を打ち上げた。公選になれば暫定政権構想がけし飛ぶことは明らかであり、数の上から大平が勝てるという読みがある。

これに対し、翌二十二日には椎名・保利会談が持たれ、政局について話合いが行われたが、「暫定」で行くとの意見の一致が見られたとされる。この頃から、「暫定」も椎名だけではなく、前尾暫定、保利暫定など、いろいろな構想が虚実取りまぜて噂され、田中首相の正式退陣表明前に、政局はポスト田中にむけて動きだしてしまっていた。

十一月二十六日の閣議には、大平蔵相から、米価、給与など追加財政需要の後始末という性格の二兆二千六百億円にのぼる昭和四十九年度補正予算案の概要が報告され、これが了承を得たのち、竹下官房長官が田中首相の退陣声明を発表した。

「政権を担当して以来、二年四カ月余、私は決断と実行を胆に銘じ……」から始まり、「わが国の前途に想いをめぐらすとき、私は一夜、沛然として大地を打つ豪雨に心耳を澄ます思いであります」に終わる「私の決意」は名文であったが、自民党内にとつては、これは「田中以降」の政変劇の開幕を告げる合図であった。

田中首相が退陣を表明した直後から、自民党内は大きくゆれ、次の有力な総裁候補と目される福田赳夫、大平正芳、三木武夫の三陣営の間で活発なハラのさぐり合いが始まった。三陣営の基本的な立場は、公選によって後継総裁を決めるべしとする大平派と、話合いによって選任すべしとする福田、三木派とに分かれた。党内の力関係からすれば、四十七年の

『ポスト佐藤』を争ったさいの二位である福田と、三位ではあるが田中陣営の支援が得られることは間違いない大平の争いであり、それぞれが自らに有利な方法による後継総裁選出を主張するものと見られた。

大平派の最高幹部の一人である鈴木総務会長は十二月十日、いち早く、公選を行うための党大会を招集したい、という意向を表明した。党内には鈴木発言に対しさまざまの反響が生じた。公選になれば歩が悪いと読んだ福田、三木両派は鈴木発言に猛反発して、あくまで話し合いによる総裁選出を主張し、もし総裁公選が実施されるなら、党大会をポイコットすることも辞さない、と強気の構えをみせた。

対立は日ましにエスカレートするばかりだったが、舞台裏では福田、大平、三木の三有力候補の間の接触が極秘裡にはかられていた。この働きかけは、主として福田、三木サイドから行われた。福田派の幹部である坊秀男、早川崇らは鈴木総務会長を通じて、しきりに大平・福田会談を呼びかけていたが、十一月二十七日早朝、世田谷区松原の永野重雄日商會頭邸で大福会談が実現した。この会談では福田が話し合いによる選出を主張し、永野も「長幼の序で、福田氏をまず推して」と助言したが、大平は「やはり公選で行きたい。姿勢を正した選挙での決定が最も公正明朗だと思う」と答え、話し合いは物別れに終わった。

翌二十八日早朝、こんどは渋谷区南平台の三木邸の隣にある三木の女婿の家で大平・三木会談が行われた。この会談は三木が申し入れたもので、当日朝、大平邸で偶然にもこの電話をとったTBSの青木徹郎記者は、「実力者同士の談合はあってはならないと主張していたこともあって、三木さんが自ら電話をかけてきたのには、いささかびっくりした。……大平さんは非常に丁寧に対応されていたが、電話が終わると私に『青ちゃん、これから三木と会うが、内緒だ』と口止めをした」(『回想録』追想編)と記している。大平・三木会談も福田との会談と同様、公選論と話し合い選出論の平行線だったが、会談の終わり頃に三木が新党結成構想をほのめかし、大平はいささか驚いたという。

大平派對福田・三木両派の対立は日増しに深まり、抜きさしならない泥沼の様相を呈しはじめた。この党内情勢に椎名副総裁が調整役として動き出したのは、その二十八日午後からである。船田中元衆議院議長らの肝煎りで開かれた党顧問会

議には四十九人の顧問が出席した。大平派の福永健司と田中派の久野忠治が公選論を主張したものの、大勢は話し合い論に傾いた。権名副総裁はこの大勢を背景として、ひとまず総裁候補と目されている福田、大平、三木および中曽根康弘、そして自分を加えた五者協議を行い、その場で方向を出すこととしたのである。

このころ大平はしきりに、「きれいな公選をやるべきだ。(マスコミの)みなさんが監視するだろうから、いいことだ。政治空白があつてはいけないので公選は早い方がいい。総理・総裁の分離はありえない」とか、「自民党という茶碗はもうこわれたんだ。これをテープでとりあえずくっつけておこうというのが話し合いなんだ。全部こなこなにしてもう一度焼き直すのが公選論だ」とか語っている。大平としては、一定の段階まで話し合いをすれば、お互いの立場が対立しているので決着がつかず、最終的には公選になだれ込むと見ていたのである。

十一月二十九日、権名副総裁は四実力者を党本部に招いて個別に会談した。三木、福田の両者はかねての主張通り話し合い選出を唱え、中曽根は「四人にこだわらず全党的に選んではどうか」と暗に権名副定をも検討の対象とするようほめかけた。焦点は四人の中でただ一人、公選論を主張している大平との会談である。

大平が権名副総裁の基本的な考え方をただしたのに対し、権名は「いまは重大な局面なので、まずこれを乗り切らなくてはならない。来年の夏頃までに、とりあえずつなぎの政権をつくり、その間に党の体調を整えて、その後で本格的な政権をつくつたらよいのではないか」と答えた。そこで大平が「そういうことであるならば、副総裁という立場上、権名さんということも考えられるが」と言うと、権名は「身体が弱いので、こつちからやろうという気はないが、みんなからぜひにと言われれば、草履を持ってウラから逃げるわけにもいくまい」と「権名暫定」の可能性を否定しなかった。話し合い選出と政治空白につながる暫定政権論に反対する大平は、そこで、「重大な局面だからこそ、半年もの間経過的な政権をつくるのは適当ではない。賛成できない」と述べ、会談は終わったという。

会談のあと記者会見した大平は、権名副総裁との会談で暫定政権に反対したことを明らかにするとともに、「話し合いという妖怪がうろつろしている」と述べ、さらに「権名さんもやる気があるようだ」とつけ加えた。田中首相が一度は打診し、

椎名みずからが断った椎名暫定政権の構想を、調整役の立場でありながら今度は引き受けようというのであるから、これを聞いた記者たちは驚いて、この話は「行司がマワシをつけて土俵にのぼる考えがあるらしい」という表現となつてあつたという間に党内に広まつた。このため椎名は調整役に徹するが、暫定政権の候補者として行動するかを選択を迫られたが、結局「暫定」の意志を捨て、調整役として動くハラを固めた。しかし、大平が「椎名暫定」を打診し、事実上これをつぶしたことに不快感を示し、「大平はひっかけたつもりだろうな」ともらしていたという。椎名副總裁にすれば、先の改造人事で大平の巻返しにあつて自分の構想をつぶされたのにつづいて、今度も「暫定」の芽をつぶされたとあつて、大平への愉快ならざる感情を一段と深めることとなつた。

椎名副總裁と四実力者との会談は、翌十一月三十日の午前十時から行われた。この席ではまず、「ここで後継者が誰に決まっても、その人物に対して異議なく協力して、挙党一致体制をつくっていく」ことを申し合わせたのち、「党の再出発と挙党体制の確立、インフレ克服と経済安定、社会的公正の確保の三点を新總裁は実行すること」を約束。挙党体制の確立については、全党的人事を党・内閣について行う。とくに幹事長、財務委員長、経理局長は、原則として總裁派から出さない、人事は党員の貢献度をはかり、党員の励みになることを考える、総務会の構成と運用の現状を再検討し、改革を行う、政策の調査立法機能を強化する、党の外部組織を強化する——などが謳われた。

四時間半にわたる会談の終わりに、椎名副總裁は「時局がら、あすの日曜日も「足労願いたい」と述べた。これに対し、大平が「いつまで話し合いをつづけるのか、期限を切つてはどうか」と切り出したが、椎名が「期限を切つてはとことん話し合つたことにならない。可及的すみやかに（結論を）」ということと、「とやり合うひと暮もあつたという。椎名としては時間切れ寸前のところで裁定を下し、ことを一気呵成に決めてしまおうという決意を固めていたのであつた。

椎名副總裁が四実力者の中から後継總裁に三木武夫を指名するハラを固めたのは、この三十日未明のことと言われる。この頃椎名周辺では、四実力者についてそれぞれ検討を加えた。まず、大平については、田中政権の事実上の支柱であり、大平政権をつくれば「田中亜流政権」と受けとめられかねない。また福田については、田中、大平両派の反発が猛烈で、

事実上党を二分することになりかねない。そして中曽根はまだ政権担当者として適当でない。このような消去法からして、結局、三木しかないのではないか、ということになった、と推測されている。

三十日朝、椎名邸を訪れた政治評論家藤田義郎は、椎名から、次のような言葉で三木に裁定を下す意向を示唆された。「明け方ころかな、あー、こう、あたりがモヤモヤしてね、何か雲の中にいる感じになったんだ。そこにポヤーツと三木の顔がみえて、待てよ、ウン、こりゃ三木しかないなあーとフツと思っただけだ……。」「(藤田著『椎名裁定』)これによると、三十日の会談の前すでに椎名は裁定の内容を決めていたことになる。

その夜、政界ではさまざまな噂が流れた。

遅くなって、椎名の周辺からまず中曽根のもとに、裁定が三木に向かっていることが暗に伝えられ、三木、福田にも伝わった。しかし大平にだけは的確な情報が入れられず、ただ、椎名が翌十二月一日に具体的な固有名詞を出すかもしれない、もしかすると、三木であるかもしれない、という程度の話が流れてきた。大平はそれに対して、「かりに(三木の名前)が出て、それはつぶれるよ」と語った。大平としては、もし椎名が福田を推すのならば論外であって、これは正面から拒否する。もし福田以外の名前が出た場合には、福田が「ウン」と言うはずがない、したがって、調整はまとまらず、公選に行くことは必至だと読んでいたのである。また、大平は、党総裁としての田中の発言力はまだ極めて大きく、椎名も含めて五者は、この五者会談に出席していない田中の意向を無視できまいと考えていたフシがある。

公選必至と考えていた宏池会では、全員が多数派工作に散り、幹部は票読みに集中した。

十二月一日午前十時半、五者会談は続開された。椎名は冒頭、いきなり裁定を示した。彼は「選考方法で完全な合意をみざることは遺憾だが、これまでの調整の経過にかんがみ、話し合いによって、田満に新総裁を選出すべし」という要望が、党論の大勢であると判断する」と述べ、新総裁については、「清廉なることはもちろん、党の体質改善、近代化に情熱をもつて取り組む人でなければならぬ」として、「このさい、政界の長老である三木武夫氏がもっとも適任であると確信し、推挙する」と、その裁定を下した。

この裁定が下った瞬間、三木は「青天の霹靂だ」と声をあげた。このあとすぐ三木と他の三実力者との個別の会談が行われた。三木・中曾根会談の間、大平、福田の二人だけが別室に残ったさいに、大平が「これは、どついうことなのか」と福田に聞くと、福田は「やむをえんぞ、大平君。ケンカに勝っても勝負に負けるということもあるんだよ、このさいは」と答えた。この瞬間、はじめて大平は「ああ、全部話ができているな」と感じたという。椎名が福田以外の固有名詞を示した場合、福田は呑むはずがないという観測は、全く大平の思い込みに終わった。

個別会談が済んだあと、三木は手回しよく椎名裁定を受諾する一文を読み上げたが、大平は終始無然たる表情で、「裁定の扱いは少し考えさせていたきたい。夕方まで待ってもらいたい」と述べただけだった。

椎名副総裁から事前に何らの話も聞かされていなかった二階堂幹事長、鈴木総務会長、山中政調会長の党三役は「あらかじめ党機関にはかるという話ではなかったか……」と椎名に詰め寄ったが、椎名は「三役がオレの気持を註索する気があるとは気がつかなかった」と、これをかわした。

こうした中で、大平は田中首相に事の成行きと政局の収め方を話し合うべく、目白台を訪れた。このときの大平の心中には、大平によかれと心を砕いてくれた盟友であり、現総裁である田中に、真意を確認せずに一存で椎名裁定を承認するわけには行かないという思いがあったであろう。また総裁の意向を確認せずに副総裁が裁定してよいのか、という後継者指名についての手順論にも、納得しかねる気持もあつたかもしれない。

すでに述べたように昭和三十九年秋、池田首相が病気で退陣の表明をしたさい、佐藤栄作、河野一郎、藤山愛一郎の三人が後継総裁候補の名乗りをあげた。川島副総裁らが調整工作を行ったが、三者とも強気の構えを崩さなかったため、調整は一本化できず、結局、池田首相の指名で佐藤に決まり、決着がついたという経緯がある。比較をすれば、今度の場合もこの十年前のケースと同様で、田中首相が退陣を表明したあと、四人の候補が名乗りをあげた。大平は、前と同じく副総裁の椎名が調整工作を行ってなおかつ一本化できなければ、田中総裁の裁断にまたざるをえない。後継が総裁一任とな

らなければ、党則に従って公選に進むしかないと考えていたのである。

田中首相はこの日午前、埼玉県の久邇カントリークラブに出かけていたが、大平は田中の帰宅を待つ間、さまざまに思いをめぐらした。裁定を拒否した場合、相手方が新党に走るか、大平サイドが孤立するか、いずれにしても混乱は避けられまい。それに暮も迫って、補正予算案をはじめ蔵相として取り組まなければならぬ課題が山積している。田中が椎名裁定を強く拒否すればともかく、そうでなければ裁定は呑まざるをえまい。大平の心中にはもはや、それはそれで一つの選択である」と、事態を客観的に見るゆとりができていた。

田中が帰宅して行われた会談では、大平が「自分は裁定に抵抗して横に寝るべきかもしれない。しかし、そんなことをしたら暗い十二月になり社会不安をひき起こしかねない。それは避けなければなるまい」と切り出した。田中は「これはしようがないと思う。うまくやられた。五十一対四十九でキミの負けだ」と答え、大平も最終的に受諾のハラを固めた。

椎名裁定直後に大平がすでに退陣を表明している田中首相を訪ねたことに対して、党内から「大平の田中依存がハッキリした」とか、「主体性のなさをさらけ出した」などの批判があいついだ。大平は一言の弁明もしなかった。

大平を除く三木、福田、中曽根の三者が椎名裁定を呑み、田中首相も事実上了承したことで、大平派を除く党内の大勢はこれを受け入れることには固まった。あとは、大平派がどのような形で『終戦処理』を行うかだけである。大平派は、総務会に、「後継総裁選任は、党則どおり公選で選ぶのがスジであり、今回の裁定は例外とし、今後、前例としない」という申合せを提案することになった。この根回しをしたのは浦野幸男副幹事長だった。大平は、提案が総務会の満場一致諒承を得たという浦野からの報告を聞いたあと、「同志の諸君にご心配をいたさながら、不徳のいたすところで、ご期待に応えない結果となった。みなさんにご苦勞をかけた」と、宏池会の人々の勞をねぎらった。

歴史は自分だけが用意していたシナリオを演じ、政変劇は終わったのである。

それから数日して、記者との懇談で大平に対して記者から、「なぜ、あの時椎名裁定をあくまで拒否し、公選を主張しなかったのか」という質問が出た。大平は「ボクもそれを考えなかったわけではないが、ボクと福田さんが四つに組んで相

撲をとるほどいまの自民党の土俵はしつかりしていない。まわしを締め、四股を踏んで、さあこれから相撲をとろうと思つたら、土俵がなくなつてしまつたんだ」と答えた。「椎名裁定をどう思つか」との問には、「自民党にもなかなかのボリテイカル・アーチストがいるじゃないか。だが、ステーツマンじゃない。アーチストだよ」と答えたあと、ポツリと「歴史の狡智だよ」とつぶやいた。してやられた思いが残る同志たちに、「ぼくはそんなに腹が立たんのだ」と言つたが、まんざりの強がりとも見えなかつた。